人の世は廻る縁の糸車

小宮山　とう子

生き長らえることの辛さ。そんな思いを抱きながら窓の外を眺めるだけの病床生活に入ってすでに三回目の桜を諸岡聡美（もろおかさとみ）は愛でていた。

「桜は美しい。ではあっても、もうこれで見納めにしたい」

聡美が、声に出すこともなく呟く。と、同時に朝の陽に照らされて光る雫を枕元の染みへと化した。

ベッドと一体化したかと感じるほどに躰は自身の思とは明らかに違ってしまっている。医師や看護師が患者医に抱く思いよりも遙かに大きな落胆が聡美の全身に襲いかかっていた。それでも、四回目の桜を愛でるころにはそんな思いさえもかき消すかのように聡美の躰は認知症に犯されてしまっていた。身動きもままならない状態が脳の働きを止めてしまったのかもしれない。

だが、このことによって皮肉にも闘病の苦しさから逃れることのできる利点へと変化していた。

聡美が大峰病院（おおみねびょういん）に入院する切っ掛けとなったのは六年程前の夏の出来事だった。子供達が孫を連れて年に一度の里帰りにやってくると心を弾ませ、近くのスーパーへの買い出しに出掛けた帰路、両手一杯の荷物に気を取られたのかもしれない。慣れ親しんだ近道とばかりに築山程度の丘に造られた児童公園を横切り自宅まで数百メートルとばかりに階段の上に立って一息入れ、足を一歩踏み出したと同時に転げ落ちた。何かにつまずいたわけでも無ければ踏み外したわけでもない。なぜか膝がいうことを聞いてくれなかったとしかいいようがない。わずかに五段ほどの階段ではあったが惨めな姿を道路に預けたまま身動きが出来なかった。偶然に通りがかった近所の人の通報で救急車が呼ばれ地域の総合病院へと搬送された。

「命に関わることはありませんが、腰の骨にひびが入り、右の大腿骨が複雑骨折をしています」

近所の人から事故の知らせを聞いた聡美の夫、孝昭（たかあき）は緊急治療を施した医師からの説明に不安をよぎらせた。

聡美と孝昭はともに七十五歳を迎えたばかりであった。二人は、髪を黒く染め明るい服装を心掛けていた。

傍目には歳相応以上の健康が維持できていると羨ましがれてもいた。長女の亜希菜と長男の孝一はすでに所帯を持ちそれぞれが子供もいる。

「亜希菜も孝一も伴侶に恵まれ、仕事に子育てと立派にやっている。おかげ様で私達も元気。これからも末永く二人仲良くやりましょうね」

サファイア婚の祝いに銀山温泉の雪景色が見たいと目を輝かせた聡美。宿に着くと早々に白い景色に同化したいと降り積もった雪に足跡を附けながら「寒い、寒い」と口にはするものの声を出して笑っていた聡美。さらに、雪が積もった橋の欄干を背に何度もシャッター音をねだった聡美。年甲斐もなく、ふわふわの雪を玉にして孝昭の背中に投げては幼子のような笑顔ではしゃぎながら逃げ回った聡美。階段から転げ落ちるわずかに二年前の楽しい想い出だった。

三度に及ぶ手術を乗り越えたもののベッドから起き上がることも出来ない状態が半年余りも続けば躰中の筋肉が衰える。孝昭や看護師の手を借りながらの車椅子への移動にも支障をきたすようになればリハビリなど出来るはずもなく結果として寝たきりとなるほかに術はなかった。

「ご主人、残念ではありますが奥様の躰の筋肉の衰えを回復させるには困難かと思われます」

談話室に呼ばれた孝昭に主治医から寝たきりの状態の回復が見込めなければ転院はやむを得ないとの宣告でもあった。わずかに五分ほどの面談のあと、勧められるがままに医療ソーシャルワーカーを訪ね、転院先についての話し合いがなされた。

ほどなくして、この大峰病院に転院となった。すでに四年目になる。歳を取るとはこれほどにも残酷なものかと孝昭は胸を締め付けられる思いを日々乗り越えている。聡美の躰は辛うじて自分の意思で首だけが窓の外を眺めるために動かすことが出来るものの介護が無ければ水さえも口にすることが出来なくなっている。自分の意思で何も出来ない、何もしない状態が続けば追いかけるかのように認知症が襲いかかる。いや、もはや聡美自身が悩むことはない。そんな自覚さえも無くなっている。寝たきりになるとはそういうことなんだと孝昭は悟るほかに術はなかった。聡美にも大峰病院が担っている役割を知らないわけではない。ではあっても、大峰病院のベッドに横たわっている現実そのものが聡美には認識出来ていない。日課ともなってい

る孝昭との一時間余りの面会でさえ笑顔を見せるものの会話はすでに成り立っていない。いや、長年連れ添った夫だとの認識さえも有りはしない。
「おじさん、よく見かけますね。わたしの夫と同じで色男ね」
孝昭が見舞いに訪れるたびに担当介護士の大村紀代子がベッドのリモコンを操作する。微かな機械音とともにベッドに横たわる躰の上半身が起き上がるのと同時に聡美の顔が綻んだ。
「ありがとう。聡美さん、貴女も美人だ」
「だめよ、口説こうなんて。わたしには素敵な旦那様がいるのよ」
聡美の躰が安定した状態にあることを見届けると大村紀代子は「聡美さんまたね」と声を掛けて病室を出て行った。
「ありがとう」と、口にはだすもののすでに聡美は自分の名前すら理解出来ていないのかもしれない。ましてや今、何処にいて何故ベッドに横たわっているのかさえも理解出来てはいない。自由の全く利かない躰をベッドに横たえながらも屈託のない笑顔を孝昭に見せてはいるが誰なのかは理解出来てもいない。だからといって、これまの自分の人生の全てが消えているわけではない。意思の疎通としては不安定ではあっても会話ができないわけでもない。幼少期、少女、そして孝昭との出会い、結婚、出産、主婦として、妻としてのこれまでの暮らしをも断片的ではあっても確かな想い出が消えたわけではない。心の中に収められた幾つもの引き出を開けては見舞いに訪れる孝昭に披露することもあった。
「聡美さんは、旦那様やお子さん達に囲まれて幸せな毎日だったんですね？」
孝昭は、複雑な心の内を顔に表わすことなくどこまでも優しく応える毎日だった。
「あら、おじさん。また来てくれたの？」
「ええ、聡美さんが退屈しないようにと思って」
毎日のように大峰病院に孝昭が通う成果なのかも知れない。患者の世話をする看護師の顔さえ憶えられることはないほどに痴呆が進んでいる聡美が孝昭の顔を覚えていた。
「ありがとう。でもね、わたしの主人も子供たちも毎日会いに来てくれているのよ」
毎日夢の中に登場するのであろう夫と子供たち。夢

と現実との区別さえおぼつかなくなっている。ではあっても聡美の顔つきはベッドから起き上がることさえ出来なくてもいつも微笑んでいる。
「そうですか、聡美さんなら子育ても上手だったでしょうね」
「あらいやだ、亜希菜(あきな)も孝一もまだ小さいのよ。子育の真最中。主人は仕事で忙しいからわたしが頑張らないと・・・・。愛情を込めて毎日、絵本の読み聞かせをしているのよ。かわいらしい顔をして寝息を立てるころに主人が帰って来るの」
屈託なく笑う聡美の顔のしわがなんともかわいらしくも孝昭には見えた。
「聡美さん、毎日いいわね。妬けるくらいに羨ましいわ」
担当看護師の沢上美咲(さわかみみさき)が回診にやってきた。
「あら、まき子さんお久しぶりね。すっかり美人さんになったわね。どんなお仕事をしているの？」
誰と勘違いをしているのか孝昭の知らない名前が看護師に投げられた。
「聡美さん、お薬の時間だから呑んでね」
看護師の沢上美咲は気にすることもなく、愛想の良さを保ちながら粉薬と予め砕かれた錠剤を紙コップに入れ白湯を注いで聡美の手を取りながら手渡し呑み干すようにと促した。コップに注がれた僅かな白湯を飲みきるのさえ健常者のそれとは違い時間を要する。その間、看護師が聡美の手を放すことはない。
「上手に呑めたわね。次は血圧を測らしてね」
「聡美さん、回診が終ったら桜を見にいこうよ」
会話は成り立っていないものの勤続八年を迎える看護師の沢上美咲の手際よさに抵抗する素振りも見せずに大人しくなされるがままの聡美の手を優しく握りながら孝昭が声を掛けた。
「あらっ、血圧が本の少し高いわね。きっとご主人が聡美さんの手を優しく握っているせいね」
「貴女どうしてそういうことを言うの？　この人はわたしの主人じゃああありません」
不思議と会話が成り立っている時が有るから厄介なのかもしれない。それも決まって孝昭の存在が会話の中に絡んでいるときであった。
「そうなの？　あまりにもお似合いだったからてっきり聡美さんのご主人かと思ったわ」
そんな時は決まって看護師の沢上美咲は『聡美さん

は幸せな人生で羨ましいわ』と、本音とも思えるかのような微笑みを返していた。
「聡美さん、旦那様とお花見のデートだって？」
入れ替わるかのように介護士の大村紀代子が車椅子を押しながら病室に入ってきた。
「あなた、いい加減なことをいわないで。主人は会社にいっているわ」
聡美が、顔色を変えるほどに強い言葉を放った。
「ごめん、ごめん、そうだったわね」
大村紀代子は、聡美に謝りながら『では、後はよろしくお願いします』と、聡美を車椅子に移し終えると孝昭に軽く頭を下げて病室を出て行った。
「何処の人だか知らない人までが余計なことを・・・。あなも、あまりわたしになれなれしくしないでね」
孝昭の胸の中に複雑な思いがいつも居座っていた。
聡美の心の中は、孝昭や子供たちへの愛で埋め尽くされていることに間違いはない。ではあっても、目の前の孝昭の存在を認めることが出来ていない。過ぎ去った時間の中だけが聡美にとって生きているという実感に包まれる場所であって、現実の世界を認識することが出来ていない現実がそこにあった。
「綺麗ね。桜はいつ見ても心がなごむわ。わたしね、毎年さくらが咲くと子供や主人とでお花見をするのよ。お弁当を作るのが楽しいの。昨日もお花見をしたのよ。こども達がはしゃぎ回っていた。主人はそれを嬉しそうに眺めていたのよ」
聡美は病院を囲むかのように植えられた何本もの桜を仰ぎながら懐かしそうに微笑んでいる。
「聡美さんのお子さんは小学生ですか？」
孝昭は聡美に合せるかのように子供の歳を聞いてみた。
「子供は二人。長女の亜希菜が小学校の五年生。下の子が孝一、小学三年生。二人とも元気で良い子なのよ。勉強も出来るし。私と主人のいいとこ取りのいようなこどもたちに囲まれてわたしは幸せ」
車椅子に乗る目の前の聡美の心の状態は三十歳を少し過ぎたころに戻っているのかにも孝昭には思えた。
何枚もの桜の花びらが時折、春の風にのって舞い降りてくる。その花びらが春陽の柔らかさを演出する。しかし、車椅子を押す孝昭には心が締め付けられる思いでしかない。若い頃の三分の一にも満たない頭髪。それもその全てが白く櫛が通されているわけでもなく

みすぼらしい老婆そのものでしかない。そんな髪にも桜の花びらが舞い落ちる。風情などと呼ぶにはほど遠く孝昭の目頭を熱くさせるだけでしかなかった。
「聡美さん、そろそろ病室にもどろう」
それからも孝昭は毎日聡美を見舞った。
「あら、おじさん。またきたの？」
「ああ、わたしも独り暮しになって時間を持て余すようになってね」
「だからって・・・。午前中ね、息子の孝一が孫を連れて会いに来てくれたのよ。孫っていいわね。おじさん、孫はいるの？」
「もちろんいますよ。とっておきに可愛い孫が」
聡美の話は、毎日変わる。亜希菜や孝一が幼子だったり、大学生だったり、家庭を持ったりと。だからといって想い出話をしているわけではない。まさに、その時々での出来事として口にしているのだ。これまでの聡美が過ごしてきた人生の時空をタイムスリップしているかのようにだ。究極は、自身が小学生にまで戻ったこともある。孝一との出会いが聡美の人生を最高のものに押し上げてくれたと心の底から嬉しそうに口にしたこともあった。
「おじさん、知ってる？　人の世は廻る縁の糸車ってことば」
「ええ、知ってますよ。たしか徳川八代将軍の吉宗公の言葉だったかな・・・」
「おじさん、物知りね」
「糸車がどうかしたの？」
「わたしね、生まれた時から色んなことがあった。苦しいことや悲しい事もあったわ。でもね、嬉しいことも一杯あったの。素敵な主人に出合えて楽しい家族が出来て年老いてゆく。仕事一辺倒の主人だったから独りでの子育ては大変だった。だからといって家庭をおろそかにしたわけではないのよ。こども達との想い出をたくさん主人は作ってくれたわ。そして、こども達が家庭を持ち、また二人だけの生活が始まった。相変わらず主人は仕事、仕事。でもね、定年を迎えると会社が用意してくれた役員の席をポ～ンと蹴って『これからは私との時間を取り戻すんだ』って・・・・。嬉しかった～。雪の銀山温泉にも二人で出掛けたのよ」
溢れるほどの笑顔ではあっても聡美の目が潤んでいる。
「いろいろと苦労を掛けたり淋しい思いをさせたね」

孝一は、耳元に流れる聡美の雫を手でぬぐいながら優しく投げた。
「いけない、おじさん。今何時？　主人を起こさないと」
慌てたかのように聡美が口にすると同時に起き上がろうとはするものの躰が反応するわけではない。間違い無く聡美は認知症をわずらった老婆であり寝たきりの病人である。それでも、ときおり家族との出来事を口にする聡美の表情はとても認知症などとは孝昭には思えなかった。
「人の世は廻る縁の糸車」
孝昭は、聡美の耳元に優しく囁きながら握る手に愛しさを込めた。
「旦那さん、聡美さんがテレビの暴れん坊将軍を観ていて何度も口にしていましたよ。人の世は廻る縁の糸車って。どこか、懐かしんでいるかのようにしみじみと。ほんと、不思議な患者さん。他の認知症の患者さんとは全く違っていつも微笑んでいる。うらやましいくらいに幸せな人ですね」
昨晩、黄泉へと旅だって空になった同室のベッドメーキングを終えた介護士の大村紀代子は孝一に軽く頭を下げて病室を出て行った。
「それほどに遠くはない日に、聡美も旅立つことになる。その時がくるまで俺は聡美に毎日会いにくるからね」
孝昭は、面会時間の終了とともに声にだすことなく聡美に囁いて病室を後にした。

完